「ともに考え、話し合う」道徳授業のための情報誌

あかつき道徳通信

教授用資料

No.5
2018年10月18日

巻頭コラム 疾風怒濤の４年生
横山 利弘（元関西学院大学教授）
実践レポート「わかっていた」ではつまらない！ 高学年の道徳授業
矢田 佐和子（葛飾区立水元小学校主幹教諭）

巻頭コラム

疾風怒濤の４年生

元関西学院大学教授　横山 利弘

４年生で２分の１成人式を行う学校が増えているそうです。どういう経緯で、どこで始まったのか知りませんが、なかなか慧眼であると思います。それは単に20歳の半分が10歳だからという理由ではなく、学校現場で日々子どもたちを見ている教師が、４年生になると急に子どもが大きく変わることを実感してきたからではないでしょうか。確かにこの時期には多くの子どもが飛躍的に変化します。勉強であれスポーツであれ、その後よくできるようになる子はこの時期に頭角を現すことが多いのです。精神的な面においても、４年生あたりが人生の大きな節目であることが様々な方面の研究からも明らかになっています。

４年生について、最近は「10歳の壁」とも言いますが、それは主に知識教育の面のことを言い表しているのでしょう。これは４年生になると急に学習内容が難しくなりそれが壁のように立ちはだかるということでしょうが、これは文科省が作った壁です。学習内容を緩やかに上げていけば、坂ではあっても壁にはならないはずなのです。

２分の１成人式とは、そういう人為的な壁ではなく、自然な成長の中に自ずと表れる節目を、子どもも大人（保護者や教師）も自覚しておこうという意図で始まったものだと思われます。そもそも成人式は人生の新しいステージへの出発という意味なのですから、２分の１成人式は、子どもの行く手を阻む壁ではなく、子どもたちに新しいステージでこれから大いに飛躍してほしいという願いから発しているのだと推量していますが、どうでしょうか。

さて、前号で述べたように、３、４年生になると、道徳的な判断は、行動のもたらした結果よりも動機が問題であることに気付くようになります。道徳性の発達は個人差が非常に大きいと言われていますが、４年生になると、多くの児童は、他者の行動を単に外形的に見るだけではなく、その動機や判断や意志まで含めて（つまり心全体を）見るようになります。こうなると、人間の行為はたてまえや正論だけで成り立っているのではないことにも気付き始めます。また、これまで教えられてきた行動規範と実際の心の動きとのギャップも経験します。さらに、友人と自分との考え方の違いにも気付き、他人との比較を通じて自分を認識するようにもなります。言ってみれば人間関係を客観視するようになるのです。

しかし他方では、気に入らない相手を無視したり、その人の悪口や悪い噂を流すなどの関係性攻撃が始まるのもこの時期です。さらに自己防衛のためにリーダー的な児童の心を類推して付和雷同するのもこの時期の特徴です。

４年生は道徳的には危機的状況にあるといえます。その中で、気の合う友達との関係を大切にする時期ですが、まだ信頼関係までには至りません。これは５、６年生になってからになります。

「わかっていた」ではつまらない！　高学年の道徳授業

葛飾区立水元小学校主幹教諭
矢田 佐和子

はじめに　算数や国語等の教科は、児童にとって、「わからなかったこと」「知らなかったこと」が授業後に「わかった！」となる学習である。一方、道徳は「わかっている」状態からスタートする。就学前に「友達と仲よくしよう」と思ったことがあったり、周りの大人に「あきらめないでがんばりなさい」と励まされたりして、既に多くの道徳的価値を自分なりに理解しているからである。

45 分間の道徳授業で、いくら主人公に自我関与させても、いくら話し合い活動でアクティブに考えさせても、児童の「わかっている」が「わかっていた」で終結する授業展開は、児童にとって面白みがない。「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」を展開するための最低必須条件は、

①授業者が内容項目を深く理解すること

②授業者が教材に描かれる道徳上の仕組みを的確に捉え、児童が発言や話し合いをしたくなるような発問構成を練ること

であると考える。さらに、授業者自身が「今日も子どもたちと一緒に考えるぞ！」とワクワクして授業に臨むと、児童の「わかっている」が「あ～そうか！そういうことだったんだ～！！」に変容し、児童も授業者も心地よいクタクタ感で一杯になる。

教材名　くずれ落ちた段ボール箱

主題名　相手の立場を考えて

ねらい　ショッピングセンターでの出来事に関連する主人公の心の動きを通して、思いやりの心をもつ大切さについて考え、相手の立場に立って親切にしようとする道徳的実践意欲を培う。

内容項目　親切、思いやり〔高学年Ｂ・(7)〕
誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること。

対象学年：小学校５年生
出典：「小学校　道徳の指導資料とその利用４」（文部省）

授業の構想

■主題設定の理由

高学年の児童は、中学年の道徳の授業で「相手のことを思いやり、進んで親切にする」ことのよさを既習している。また、これまでの生活で「思いやり」や「親切」に関わる出来事を数多く経験し、よりよく生きる上で大切なことだと理解している。したがって、多くの児童は、本教材の範読を聞いた直後に「思いやりって素敵だな」と道徳的価値を捉えたり、「今日は思いやりについての学習だな」と授業展開を予想できたりする。この「わかっている」状態にプラスして、「親切・思いやり」についての新たな気付きを与えることが本時の一番のねらいである。本時による児童の学びが「困っている人に思いやりの心をもって、進んで親切に接したい」で留まっていたとしたら、それは新たな学びとはならないと考えるからである。

本教材は、「思いやりの連鎖」と解釈されることがあるように、「思いやり」から発生した「親切な行為」がいくつか出てくる。一口に「親切」と言っても、できて当たり前の「親切」、結果的に相手の負担になる「親切」、心から喜ばれる「親切」等様々ある。主人公が体験したいくつかの「思いやり」を通して、行為に至った気持ちと行為を受けた側の気持ちとの関係を多面的・多角的に考えさせ、「自分自身が相手に対してどのように接し、対処することが相手のためになるのか」（学習指導要領解説より）を深く考える機会にしたい。

■指導にあたって

導入と展開最終段階で「思いやりのある人とはどんな人？」と発問する。導入で問う理由は２つある。１つ目は各児童が授業前に既にもつ道徳的諸価値の理解を共有するためであり、２つ目は友達の発言を聞いて、児童自身が「あの子はそう思うんだなあ。」「そうそう、私と一緒だ！」等確認することで、安心して範読を聞けるようにするためである。そして、展開最終段階で再度問う理由は、児童自身が「親切・思いやり」についての考え方の変化を実感できるようにするためである。

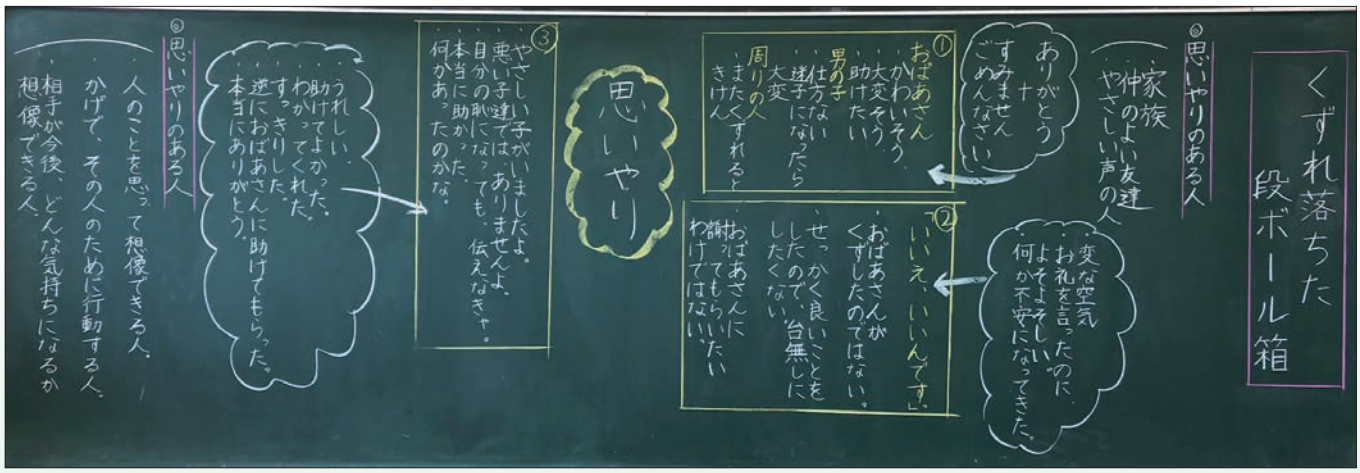
展開における発問は、「親切・思いやり」についての新たな気付きを促すために、ストーリーに出てくる「思いやり」を３つに分けて、主人公とおばあさんの心情を問いながら互いの発問を関連させる構成を練った。

本時を通して、児童が「今日の１時間で新たな学びがあった」と自覚できるような道徳の授業を構想した。

教材の内容（あらすじ）

●ショッピングセンターに買い物に来た「わたし」と友子は、小さな男の子が不注意でくずしてしまった段ボール箱を、男の子を連れてきたおばあさんの代わりに進んで整理しました。ところが、事情を知らない店員さんに、「わたし」と友子が段ボール箱をくずしたのだと勘違いされ、怒られてしまいます。むしゃくしゃする「わたし」と友子でしたが、誤解だと知った店員さんから小学校にお詫びとお礼の手紙が届き、心が晴れるのでした。

	学習活動	発問と予想される児童の反応	指導の留意点
〈導入〉	■自分自身や友達が「思いやり」をどのように理解しているのか確認する。	○「思いやりのある人」とはどのような人だと思いますか。 ・優しい人。 ・相手のことを考えている人。 ・心が温かい人。	児童一人一人が現在もっている道徳的諸価値の理解を確認し、イメージを共有する。
〈展開〉	教材を読む ■困っている相手に対して、積極的に行動する「思いやり」について考える。	○「わたし」はくずれ落ちた段ボール箱をどのような気持ちで積み上げていったのでしょうか。〈思いやり①〉 ・早く元通りに直そう。 ・おばあさんが困っているので助けたい。 ・おばあさんは男の子を追いかけた方がいい。手伝おう。 ・周りの人たちがあまりにも手伝おうとしないのでおばあさんが気の毒だ。	教材を範読する。 主人公の「一つ一つていねいに」という行動を動作化させ、意欲的に親切にしたことを理解させる。また、おばあさんにとっては「ありがとう」と同時に「申し訳ない」という気持ちも生じていることを押さえる。
	■相手の立場を考えた「思いやり」について考える。	○「わたし」はどんな思いで「いいえ、いいんです」と立ち去ったのでしょうか。〈思いやり②〉 ・おばあさんに気を遣わせたくない。 ・店員さんに誤解されたけど、おばあさんには関係ないことだから言わないでおこう。 ・おばあさんは悪くないので、愚痴を言わないでおこう。	おばあさんの立場を考えて、気遣いさせまいと感情を出さなかった主人公の心遣いを考えさせる。
	■心からうれしくなる「思いやり」について考える。	◎「わたし」はどんな思いで校長先生の話を聞いていたのでしょうか。 ・店員さんがわかってくれて安心した。 ・おばあさん、ありがとう。 ・心の中のもやもやしていた部分が無くなって、爽快感を得た。 ・校長先生にもほめられてうれしい。 ・やっと人の役に立てたと思えた。 【深める発問】おばあさんはどんな気持ちで店員さんに事情を説明したのでしょうか。〈思いやり③〉 ・孫の失敗を謝罪しなければならない。 ・親切にされたことを店員に知らせることがお返しになる。 ・素晴らしい小学生がいたことを知らせたい。	思いやりの心から生まれる親切な行為は、いろいろな形で表れることに気付かせ、親切な行為に対して純粋に心から「ありがとう」と言えるのはどのような時か話し合わせる。
	■導入時の自分の考えと比較する。	○「思いやりのある人」とはどのような人でしょうか。 ・相手の立場を考えられる人。 ・相手のことを思ったり、見通しをもって相手のことを考えたりして、さりげなく行動できる人。	導入時の考えと比較させることで、子どもたちが自分自身の道徳的価値理解の変化を捉えられるようにする。
〈終末〉	■自分の考えをまとめ交流する。	○学んだことを書きましょう。	自分自身を見つめ直したり友達の考えと比較したりして、思いやりについての考えを深める。



実践を振り返って

■中心発問でのやりとり（T：教師、C：子どもの発言）

T：○○さん、どんな思いで校長先生の話を聞いていた？
C：店員さんは、自分のことをわかってくれた。
T：一方的に怒られちゃったものね。
C：誤解が解けてよかった。
C：店員さんに怒られたけど、やっぱり手伝ってよかったな。
C：すっきりした。
T：何が？
C：また買い物に行くだろうし、また田口さんに会っちゃうかもしれないから、誤解が解けてすっきりした。
T：なるほどね。どんな思いで校長先生の話を聞いてる？
C：わかってくれてうれしい。
C：田口さんにすみませんと思ってもらってよかった。
C：本当は、人を助けるのは当たり前だと思う。でもいろいろあって、田口さんにおばあさんが伝えてくれたから、やっぱり手伝ってよかった、やりきったという気持ち。おばあさんに助けてもらったという気持ちもある。
T：深いね～。では、また、「わたし」の着ぐるみを脱いでおばあさんを装着して。おばあさんは、店員さんにどんな気持ちで言ったんだろう？
（※「着ぐるみ（を着る）」…登場人物になったつもりで考えること。）
C：自分たちのためにやってくれた、悪い子じゃないんだよ。
C：いいことしてくれたんだよ、と伝えたかった。
C：二人じゃなくて、孫がたおしたことを伝えたかった。
T：自分の孫が……ってわざわざ言いたかったの？
C：自分が恥ずかしくなっても教えなきゃっていう気持ち。
T：恥ずかしいのに？
C：さっき「いいんです」って変な空気だったから、おばあさんは何か感じていて、恥ずかしくても言ったんだと思う。
T：ほ～。じゃあ、「わたし」の着ぐるみにまた交換。装着し直すよ。
T：おばあさんはこんな思いで言ってくれたんだ。どう思う？
C：うれしい。ありがとう。
C：すっきりさせてくれて、ありがとう。
T：これ、思いやり①で出てきた「ありがとう」と同じ？
C：違う。本当にありがとう。①のは「ありがとう、すみません」。
T：たとえばなんだけど、もし、おばあさんがその場に店員さんを呼んで説明し始めたとしたらどうだったろう？
C：そこまでやらなくても……って思って、変な感じになる。
C：田口さんの立場が悪くなる。こっちも嫌な感じがする。
C：おばあさんに、気を遣わせて悪いなあって思う。
T：思いやりがある人ってどんな人？（展開最終段階へ）

■児童の振り返りから

・本当に思いやりのある人は、縁の下の力持ちみたいな人だと思いました。
・思いやりのある人は、自分から行動したり、かげでその人のことを思って行動したりする人のことです。１００均で１０８円の買い物をして、１万円札を出している人がいました。何でだろうと思っていたら「おつりは西日本豪雨に寄付してください」と言っていました。今日の授業で、あの人は思いやりの出し方がうまい人だとわかりました。
・思いやりとは、気遣いができることみたいな１種類のものと思っていたけれど、その場に合わせて使い分けられるのが、本当の思いやりなんだと感じました。
・大人って思いやりのレベルが高いなと思いました。
・相手がいやな気持ちや複雑な気持ちにならないように気をつけることも思いやりだとわかった気がします。
・思いやりのある人は、おもてなしをするような人だけじゃなくて、自分から人のためにする人や、かげでがんばる人もいるんだと思いました。
・思いやりは人のことを思って、その人のその後の人生まで想像することだとわかりました。私は今まで当たり前のことしかやっていなかったけれど、人のために行動することはすばらしいことだと思いました。
・今まで思っていた思いやりは、困っている人を助けたり、泣いている人を励ましたりする当たり前のことでした。これからは、やってもらって一番うれしくなる思いやりをやりたいと思いました。
・本当の思いやりを学びました。優しい人やおもてなしの心をもっているというだけでなく、その方法によっても思いやりが表せることを学びました。

■おわりに

授業展開を見た学年の先生は「難しそう」と顔をしかめた。しかし、子どもたちは「今日も考えた～疲れた～」とうれしそうだった。今まで捉えたことがない視点で内容項目について考え、ストンと心に落ちた時の爽快感を得ると、次週の道徳が楽しみになる。子どもたちの「あ～そうか、そういうことか～」の笑顔を目指して、日々精進あるのみだ。

あかつき道徳通信　No.5　教授用資料

発行　廣済堂あかつき株式会社
本資料の内容についてのお問い合わせは、小社編集部　（TEL :03-6435-6690）までお願いします。

廣済堂あかつき
〒176－0021　東京都練馬区貫井４－１－１１
TEL :03-3577-8966　　FAX :03-3577-8967

バックナンバーは、下記 HP でご覧いただけます。
http://www.kosaidoakatsuki.jp